# 第二言語習得研究から考える英語学習方法

東京理科大学 教養教育研究院
野田キャンパス教養部 准教授　半沢（はんざわ）　蛍子（けいこ）

東京理科大学 教養教育研究院
野田キャンパス教養部 准教授　安田（やすだ）　利典（としのり）

## ■はじめに：英語を勉強する前に学ぶべきこと

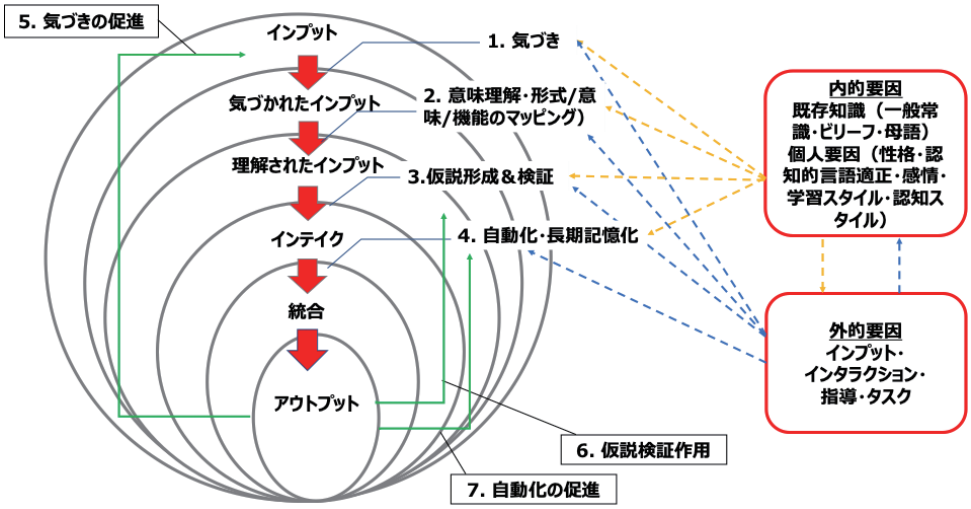
いきなりですが質問です．「今，学んでいる英語の知識がどのように英語習得につながるかを考えたことがありますか？」私たちの多くは，小学校から大学まで６年以上の長い期間をかけて英語学習に取り組みます．しかし，「どのように英語（広くは母語以外の第二言語）は習得されるのか」という，そもそもの習得プロセス自体について学ぶ機会はほとんどありません．もちろん，母語（多くの読者にとっての日本語）であれば，習得プロセスなど意識しなくても日常生活に困らないレベルの能力が自然に習得できます．しかし，第二言語である英語の習得には，多くの日本人が非常に苦労しているのが現状です．そこで，第二言語習得に関しては，単に「語彙や文法」といった言語知識を学ぶだけではなく，「人間は第二言語をどのように習得するのか？」というプロセスを理解し，それに適した方法で学ぶことが不可欠になるのです．習得のプロセスを知ることで，今取り組んでいる学習内容が，どのように自分の英語力を向上させるのか（もしくはさせないのか）を客観的に判断できるようになります．習得プロセスを知ることは，効果的な英語学習の「基本のキ」であり，最も大切な土台だと私は考えます．

私は第二言語習得研究を専門としています．これは，第二言語が習得されるプロセスを解明し，効果的な学習・指導のアプローチについて追求する学問です．本稿では，第二言語習得の認知プロセス（Gass, Behney, & Plonsky, 2020; 和泉，2016; 村野井，2006）の解説を通じ，皆さんにより効果的な英語学習についてお伝えしたいと考えています．

なお，第二言語習得研究には社会的アプローチ，エコロジカルアプローチなど多様な視点がありますが，本稿はその中でも「頭の中で起こるメカニズム」を説明する認知アプローチに焦点を当てます．これは，習得を考える上でとても重要な視点の一つです．

## ■認知アプローチから見る第二言語習得

認知アプローチでは，第二言語習得をインプットした情報がさまざまな認知的プロセスを経てアウトプットとして使える知識に変容していくというプロセスであると考えます．英語に限らず，何かを学ぶためにインプットに触れることが必要不可欠であることは直感的に理解できますね．ある言語を見たり聞いたりしたことが一切ないのに，ある日いきなり理解できるようになった，なんてことはあり得ません．それは魔法です．一方で，ある言語を見たり聞いたりしてインプットをすれば，それが全てアウトプットとして使える知識にはならない，ということも私たちは直感的に理解できます．もしそれが可能なら，日本人が英語学習でこんなに苦労することはありません．インプットとアウトプットとの間には様々な段階が存在するのです【図 1】．




【図 1】認知アプローチによる第二言語習得プロセス

【気づき】

最初の段階として，目や耳から入ってきたインプット情報に存在する言語項目（例：単語，文法，音）に学

習者が意識的・無意識的に気づくこと，つまり注意を向けることが必要になります．例えば，Karter worked hard yesterday.（カーターは昨日一生懸命働いた）という文章を見てみましょう．Karter から読み始めて，worked と来てここでパッと「あ，work に ed がついている，これ見たことある！」と気が付きましたか？　こうして気づいた項目を使って学習者は構文解析を行い，インプットを Karter/ worked hard/ yesterday のように意味のあるユニットに分割していきます．逆に言うと，ここで気づかれなかった項目は構文解釈，そしてこれ以降の習得プロセスでは使われることがありません．英語の授業ではよく「はい，ここでは動詞に ed がついているので，過去を表していますね」といった指示がされますが，これは学習者の気づきを促しているのですね．

【理解】

気づきの段階が終わると，次に理解のプロセスです．理解のプロセスでは，発話の意味を摑む意味分析と，発話の構造を把握する言語分析を行います．さらにこの２つの分析の結果を統合して，意味・形式・機能のマッピングが行われます．例えば，先程の例を使って説明すると，Karter worked hard yesterday というインプットが入ってくると，まずは「ああ，カーターさんって人が昨日一生懸命働いたのねー」と意味理解を行います．その後，インプットがどのような形式で表されているのか（例：ed が使われている），またその形式はどんな機能を果たすのか（例：動詞に特別な形がくっつくと過去の行為を表す）についての検討が行われます．そして，これらの理解を「『動詞＋ed』**形式**は『～した』という**意味**を伝えて，過去の出来事を伝える**機能**を果たすのだな」とマッピングを行うのです．こうして学習者が独自に頭の中に作っていく形式・意味・機能のマッピングはあくまでも仮説（仮の説明）であり，確定した言語知識ではありません．そして，この仮説は次のプロセスでとても重要な役割を果たします．

ここで，理解プロセスが意味分析と言語分析の２つに分かれていることは習得プロセスについて重要なポイントになります．つまり，理解プロセスにおいて学習者が意味分析だけをして，言語分析を行わない可能性があることを意味しています．例えば，海外に何年も滞在しているが，あまりその国の言語がうまくならないというケースがありますよね．これは，その学習者がインプットに対して当面必要な意味分析だけを行い言語分析を行っていないこと，つまり，インプットに対して形式・意味・機能のマッピングを行なっておらず，この後に紹介する習得プロセス（内在化，統合）が行われていない可能性を示唆しているのです．「海外留学をすれば英語ができるようになる」という言説がありますが，これは正しいようで間違っています．海外留学をしても言語分析を行わなければ，残念ながらいつまで経っても英語は上手くならないのです．

【内在化】

無事に意味分析，言語分析が行われた後は，内在化というプロセスが行われます．内在化とは「理解されたインプット」を学習者の言語知識体系（すでに持っている英語の知識）の中に取り込むことを意味します．この段階において学習者は，理解のプロセスで作り上げた形式・意味・機能に関する仮説とその後に入ってきたインプットとの比較，検証を行い，その仮説の承認や棄却，修正を行います．例えば，「『動詞＋ed』**形式**は『～した』という**意味**を伝えて，過去の出来事を伝える**機能**を果たすのだな」という仮説をもとに I studied hard yesterday（私は昨日一生懸命勉強した）という文章を作って，相手に伝えたとします．相手はこの文章を理解してくれるので，使った仮説は正しいことが分かり，仮説は承認されます．逆に I *runed hard yesterday（私は一生懸命走った）という文章を発話した時には，相手は怪訝な顔をするでしょう．その場合には学習者は使った仮説に何か不備があったことが分かり，仮説を棄却したり（もう２度と使わない），修正したりします．また相手からのフィードバックがなかったとしても，仮説検証は行われます．例えば，リーディングやリスニングを行い，仮説に合致するかどうかを確かめることでも学習者は仮説検証を行い，仮説を自分の言語知識に組み込んでいくことができます．

【統合】

最後に統合というプロセス，つまりここまで学習者内部に育ってきた仮説がさらにしっかりと学習者の中に統合される変化が起きます．この変化はいくつかの種類があり，主に作り上げてきた仮説の長期記憶への保存，仮説が自動的・瞬間的に運用できるようになる自動化，また学習者の既存知識との融合，競合による知識の再構成（McLaughlin, 1990）が挙げられます．統合はアウトプットで使える知識の形成にとても重要なプロセスです．まず，知識の再構成は学習者が同じ間違いを繰り返す現象に関わります．例えば，学習者が「『走る』を過去の出来事として伝えるときには ran という形を使うのだな」と（適切な）仮説を作り，仮説検証でも承認できたとします．しかし，その学習

者が「過去のことを話すには動詞に ed をつけると『…した』になる」というより強い既存知識を持っていると，新しい（適切な）仮説は負けてしまい，その結果，その学習者は先ほどの runed といった実際にはありえない形を作り出すことになります．

また，自動化はスムーズなアウトプットに関わります．一度内在化したとしてもその知識はスムーズには使えず，すぐに記憶から消えてしまいます．一度覚えても次に思い出せないことはよくありますよね．アウトプットで苦労なく使えるようになるためには，何度もこの統合までのプロセスを繰り返す自動化を行う必要があるのです．これが統合の役割です．

こうしたプロセスを経ることでインプットとして取り入れた情報はアウトプットとして使える言語知識となります．ただ，ここでもまた注意が必要です．習得プロセスはいつでも，どんな人でも同じように進むわけではありません．先ほどの**【図 1】**を見てみましょう．習得プロセスの各段階に個人が持つ内的要因（例：感情・動機づけ・適性・性格など）や個人を取り巻く外的要因（例：学習時間・学習や指導方法など）が影響していることがわかります．こうした個人の内的要因や外的要因の違いが習得プロセスを促進したり，阻害したりしているのです（詳しくは Science Forum Vol. 444 安田利典「より良い英語学習のために：個人差理解の研究」を参照してください）．

さあこれでようやく第二言語習得プロセスの説明が完了しました．どうでしたか，インプットからアウトプットまでには皆さんが想像していたより多くのプロセスがあったのではないでしょうか？　インプットは「気づかれ」，「理解され」，「内在化され」，「統合され」て，初めてアウトプットとして使えるようになるのです．こう考えると，学習者の“間違った”発話にも再考の余地があることが見えてきますね．例えば，学習者はしばしば“I goed to see movie”や“I taked it”といった発話をすることがあります．こうした発話は学習者の不勉強や不真面目さとして評価されることが多いですが，**【図 1】**の認知プロセスから考えると，こうした発話の原因はそれ以外もあることが考えられます．もしかしたら，学習者はそもそもインプットの時点で「went」や「took」に気づいていなかった可能性があります．また気づいてはいたが，言語分析で正しく形式・意味・機能がマッピングできていなかった可能性もあります．さらに内在化の時点で仮説検証に失敗した可能性，はたまた統合プロセスでより“強い”知識に負けてしまったという可能性もあります．さらに学習者の内的要因や外的要因が習得プロセスの適切な動きを妨げてしまった可能性すらあるのです．このように習得プロセスを知ることで，単なる不勉強に由来するように見える間違いにもさまざまな可能性があることが分かります．言い換えれば，習得プロセスの各段階において適切な対策を講じることが可能になるのです．そのため，習得プロセスを知ることが第二言語学習の「基本のキ」なのです．

## ■インプットとは何か？

ここまでの話を読んで「よし英語学習にはインプットが必要なのだな」と英語の文法書を開こうとした方はいませんか？　この行動はもちろん英語習得に関連してきますが，その関連は直接的でありません．なぜならば文法書からのインプットは，習得プロセスで想定されているインプットと異なっているからです．英文法のテキストを読む，英文に関する教師の解説を聞く，資格試験の対策本を読む．こうした学習は，言語規則や仕組みなど言語知識について意識的に理解し学ぶ，明示的学習と呼ばれる学習法です．これに対して習得プロセスが想定するインプットとは実際のコミュニケーションの手段として使われる英語を指しています．例えば，英語で書かれたテキストや本を読む，英語でリスニングをするといったものが含まれます．こうしたコミュニケーションの手段として使われる英語は意味・形式・機能を豊富に内包し，学習者の習得プロセス（特に理解）を促します（Long, 2015）．こうした学習方法は，明示的学習に対して，暗示的学習と呼ばれています．

もちろん明示的学習も第二言語習得プロセスを効率的に進める上で役立ちます（村野井，2006）．例えば，明示的学習を行うことで，学習者はインプットの中の言語項目に注意を向けることができるようになったり，形式・意味・機能の結びつきを明確に摑むことができたり，文法的誤りに敏感になったりします．しかし，明示的学習はあくまでも補助的な役割であり，習得のメインはコミュニケーションを介した暗示的学習だと考えられています（和泉，2016）．

さらにこのコミュニケーションを介した英語インプットについても注意点があります．習得プロセスで見てきたように，習得のためにはまずインプットされた情報の中にある言語項目に「気づく」ことが重要でした．全く理解できないインプットに触れても習得に大切な気づきを起こすことができません．つまり，イン

プットが大事だからと何が話されているかも分からない英語のニュースを聞いたり，音楽を聞き流したりすることは学習にはならないのです．気づきを起こすためには全体の意味は大体分かるが，少しだけ分からないこともあるようなインプット（Krashen, 1982）が最も効果的だと言われています．

## ■アウトプットとは何か？

さあ，最後にアウトプットについて説明をさせてください．ここまでアウトプットを学習者の持っている言語知識の単なる出力のように説明してきました．しかし，アウトプット自体も習得プロセスの重要な一部分です（鈴木，2024：Swain, 1995）．

まずは，アウトプットには気づきを促進する作用があります．「分かっていると思っていたのに，出てこない」「人の発話を聞いていると分かるのに，自分ではできない」そんなことを経験したことはありませんか．インプットをしているだけでは自分の知識のどの部分に「抜け」があるかに気づくことができません．アウトプットをしてみて初めて，自分ができない部分，また自分よりできる人との間の差に気がつくことができるのです．

またアウトプットをすることで意味分析ではなく，言語分析により注意が向けることができます．アウトプットは自分の持っている言語の知識を最大限に活用して，自分の意図する内容を伝える行為です．例えば，「昨日（過去の時点），頑張って勉強したという行為を伝えたい」と思ったら，それに合う知識（例：過去形 ed，study や yesterday という単語）を絞り出して文章を作ります．こうした言語分析への注意が，理解，内在化，統合のプロセスを促進します．また内在化プロセスでの仮説検証はアウトプットの大きな効用です．アウトプットを行い，周りからフィードバックをもらうことで，作りつつある仮説を承認，棄却，修正する判断を行うことができます．さらに，アウトプットを繰り返すことは形成しつつある仮説，知識を何度も使用し，その仮説・知識を自動化する絶好の機会です．自動化した仮説・知識は，よりスムーズな言語使用を可能にしていきます．

もちろん，ここで話しているアウトプットもインプットと同様コミュニケーションを介した英語使用が前提です．試験対策の問題を解いたり，与えられたテキストをただ読み上げたりするような活動は本来の意味でのアウトプットとは呼べません．アウトプットを通じて習得プロセスを促進しようと思うのであれば，自分の言いたいこと（意味）を考え，それを伝えるために必要な形（言語）を意識しながら伝える活動を行うことが大切です．その上で，明示的学習を通じて，より正しい言い方，洗練された言い方を学んでいきます．ここでも重要なのは，メインは暗示的学習，サブとして明示的学習を使うと言う意識です．

## ■まとめ

本稿では英語を学ぶ上で重要な習得プロセスについて概観してきました．ここから分かることは，英語習得プロセスは非常に複雑なプロセスであり，単純にインプットすればアウトプットとして使える知識が身につくというものではないということです．またこのプロセスは学習者の主体性が重要だということも忘れてはいけません．英語の習得とは「教わればできるようになる」というものではなく，コミュニケーションの中で受けるインプットから学習者自らが言語項目に，気がつき，理解し，さらに新しいインプットや自分の持っている知識と比較しながら作り上げていく学習者の自律的なプロセスなのです．

習得プロセスを知ることで，「今，行っている勉強」が習得プロセスのどこに効果を及ぼしているのか，さらに英語の習得のために自分が必要なことは何であるのか？　と言う見通しをつけることができると思います．英語の習得には莫大な時間がかかります．学習者の皆さんが英語習得の「基本のキ」である習得プロセスについての知識を獲得し，その長い道のりを少しでも見通しを持って進めることを祈っています．

**［参考文献］**


1）Gass, S., Behney, J. & Plonsky, L.（2020）. Second Language Acquisition: An Introductory Course（5th edition）. New York: Routledge.

2）Krashen, S.C.（1985）. The input hypothesis. Issue and implications. New York: Longman.

3）Long, M.（2015）Second Language Acquisition and Task-Based Language Teaching. UK: Willy-Blackwell.

4）Swain, M.（2005）. The output hypothesis and beyond: Theory and research. In E. Hinkel（Ed.）Handbook of research in second language teaching and learning（pp. 471–483）. Lawrence Erlbaum.

5）和泉伸一（2016）.『第二言語習得と母語習得から「言葉の学び」を考える：より良い英語学習と英語教育へのヒント』. アルク.

6）鈴木祐一（2024）.『新しい第二言語習得論』. 研究社.

7）村野井仁（2006）.『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』. 大修館書店.

8）安田利典（2024）.「より良い英語学習のために：個人差理解の研究」. Science Forum Vol. 444.